

私たちの暮らしは、多くの「約束」に支えられています。「約束」という行為は非常に幅広いものです。

国際法や国家間の条約・協定から、家族や隣近所との日常的な約束まで、その内容や影響の範囲は大きく異なります。

そのため、一口に「約束」と言っても、「国家間の条約」と「家族との週末の予定」を同じ「約束」として認識するのは難しいかもしれません。

影響の大きいものは「大事な約束」として重視され、影響の小さいものは軽んじられる傾向があります。しかし、どんな内容であれ、誰と交わした約束であれ、それは「等しく重要」であり、必ず守られるべきです。しかしながら、現実にはそうとらえられていないのが実情です。

例えば道路交通法においても意識の差が生じているのではないのでしょうか。速度超過や飲酒運転など、運転者はもちろん、同乗者や周辺の歩行者を巻き込む危険性のある車両に関する条項は、誰に聞いても重要視されるでしょう。

しかし、歩行者に関する条項はどうでしょうか。歩行者用信号のある横断歩道で、車両の通行がないことを確認すると、赤信号を無視して横断する人をよく見かけます。また、家族で食事に出かける約束をした後に、同じ日時に取引先から契約に関わる打ち合わせを申し込まれることもあります。仕事の約束と家族の約束を天秤にかける場面も少なくないでしょう。



約束に大小軽重なし 約束は等しく重要

このような場合、事情を理解してくれる身内や家族との約束を反故にして、仕事の約束を優先するという意見が多いのではないのでしょうか。

しかし、前述のようにどんな約束も「等しく重要」であるならば、誰とのどんな約束であれ、先に交わした約束が優先されるべきです（ただし、事故やケガ、肉親の逝去などの突発的な事象は除きます）。

先に約束を交わしている事実に対し、後からどんな事案が舞い込もうとも「すでに先約があります」と対処するのが当然であり、「先だ、後だ」と内容によって優先順位を考えるものではありません。

このように「どんな約束も等しく重要」という姿勢が信頼関係を築きます。そして、これこそが人間関係の根底を支えるものであり、あらゆる幸福の基盤となるのです。

良好な人間関係は、相手の立場に立って行動することから生まれます。交わした約束は自分にとってはもちろん、相手にとっても大事な事項のほうです。自分の都合に合わせて守るのではなく、相手の事情を考えて約束を守る。こうした行動が、人との絆を一層深めるはずで。

逆に、約束を破ることによって相手に与える不快感や不信感は大きく、人間関係にひずみを生む原因となることは言うまでもありません。

約束に対して「守らねば」という義務感で守るのではなく、「喜んで進んで守る」姿勢でありたいものです。